書式 7

助成番号	21－A03

成 果 報 告 書

記入日　2023 年　4 月　12 日

フリガナ：(　イワシタナツキ　　) 氏　　名：　　岩下　夏岐	渡航先国名 タイ	留学先の所属機関：タマサート大学 帰国後の所属機関：総合研究大学院大学

研究テーマ：タイ中部における高齢者リハビリテーションの人類学的研究

研究期間　：　2022 年　4 月 ～　2023 年　3 月（　1 年 0 ヶ月）

研究成果（概要）

タイのデイケアをコミュニティと位置づけ、その場がリハビリテーションにどのような影響をもたらしているのか調査した。結果、デイケアは高齢者の健康増進を推進する場であると同時に、社会交流の場として、高齢者の孤独感の軽減に貢献していることが明らかになった。

研究成果（詳細）

報告者は 2022 年 4 月から 2023 年 3 月までの期間、タマサート大学社会事業学部の外来研究員として、タイの高齢者向け通所型リハビリテーションセンター(以下、デイケア)において、高齢者のリハビリテーションに関する調査を行った。

【研究の目的と背景】

本研究の目的は、デイケアにおいて、利用者である高齢者やケアに関わるボランティア等のデイケアに集う人々によって作られるコミュニティが、リハビリテーションの効果にどのような影響をもたらしているのか、文化人類学的手法を用いて明らかにすることである。

文化人類学におけるリハビリテーションの研究に関しては、Mattingly の研究が挙げられる。人類学者である彼女は慢性疾患患者とリハビリテーション専門家である作業療法士が協働して、患者が生活と人生の意味を取り戻す過程を民族誌的に記述した。本研究も彼女の、いわばリハビリテーションの人類学に位置付けられるが、これら研究との相違点は分析対象を、治療関係を結ぶ二者の背景にある社会関係に広げる事にある。これまで医療システムの一つとして、治療関係を結ぶ二者の構図から分析されることの多かったリハビリテーションの臨床現場を、コミュニティという概念を用いて、人々の社会関係や健康観、リハビリテーションに効果的なものとして共有される知識や技術に着目して分析する。

【研究の方法および期間】

調査地であるパトゥムタニ県 B 市のデイケアは、自治体が主導するコミュニティベースの高齢者ケアシステムのひとつであり、タイ国内では数少ない高齢者リハビリテーションの実践の場である。報告者は、2022 年 3 月からデイケアに助手として在籍し、参与観察と聞き取り調査を行った。加えて、2022 年 10 月から研究協力者の承諾を得て、半構造的面接を行った。調査は以下の 3 点に着目して実施した。

① デイケアで実践されている高齢者リハビリテーションの背景にある人々の社会関係や健康観、リハビリテー

ションに効果的なものとして共有される知識や技術などに注目し、ケアスタッフ等に参与観察と聞き取り調査を行う。

② デイケアの場をコミュニティと定義し、一方で「デイケアの高齢者」という集団を健康に導くといった、上からの権力を人類学的調査によって明らかにする。本研究における権力とは、例えば高齢者を検査し、専門家の示す基準に沿って分類し、プログラムに組み入れて、健康を管理するといった力のことを示す。

③ タイでの高齢者に関する最新研究の渉猟、タイ保健省の施策や提言に関する資料やメディアが喧伝する高齢者の健康像に関する資料を収集し、一般に周知される高齢者の健康像について明らかにする。

【研究成果】

はじめに調査地の概要を示し、次いで調査において着目した前述の 3 点に従って、成果を示す。

調査地の概要

B 市によって設立されたデイケアには 1 日あたり 5 名から 12 名の高齢者が通っている。高齢者の年齢は 60 歳代から 90 歳代と幅広く、糖尿病や認知症、脳血管障害による後遺症といった種々の既往がある。また高齢者の多くは、仕事や結婚を機に地方から都市圏である B 市に移住してきた者が多い。デイケアで勤務するスタッフは医師 1 名、看護師 2 名、理学療法士 2 名、臨床心理士 1 名、介護スタッフ 2 名、ボランティア 2 名である。デイケアのサービスには、昼食と軽食の提供、送迎、レクリエーション活動、リハビリテーション等がある。レクリエーションにはゲームや創作活動、ヨガ等がある。これらのサービスを利用するための料金は 1 日 300 バーツである。

ポイント①について

デイケアをコミュニティと位置づけたとき、次の 2 つの役割を担っていることが明らかになった。第 1 に、健康増進に関する知識・技術が集約された場としての役割である。デイケアではレクリエーションとして、ヨガや瞑想、伝統的な薬草を用いた足浴などがある。これらはデイケアのスタッフが提供することもあれば、ボランティが自身の知識を用いて実践することもある。また外部から大学の研究者や学生が頻繁に訪れて、VR を用いて身体を動かすゲームといった最新の知識や技術が提供されることがある。高齢者の間でも愛飲している漢方や栄養剤を紹介していることがある。デイケアに集まる人々は健康に有益と思われる知識や技術を持ち寄って、自身の健康増進に役立てていた。第 2 に社会交流の場としての役割である。高齢者の中には、デイケアを「私たちの家」や「私たちの学校」と呼ぶ者がいる。そしてスタッフだけでなく、利用者である高齢者も、より高齢の者を世話する。また高齢者やスタッフは互いをお母さん、お父さん、おばあさん、おじいさん、お姉さん、お兄さんなどと呼び合っている。タイの社会では、元来、互いをそのように呼び合う文化があるが、デイケアはサービスや料金をやりとりする場というよりは、擬似的な家族のようにも見えた。こうした親密な関係性は励まし合いなどに繋がり、時にリハビリテーションへのモチベーションを高めていた。

ポイント②について

デイケアでは、高齢者が来所時に看護師や介護スタッフによって体温、血圧、脈拍、酸素飽和度を測定していた。また月に 1 回、身長、体重、腹囲の測定を行っていた。加えて理学療法士は 3 カ月に 1 度、運動機能を評価し、臨床心理士は精神と認知機能を評価する。医師や看護師も高齢者の健康状態を定期

的に評価して、それぞれの専門家が評価結果に基づいてケアプランを作成し、リハビリテーションを含む高齢者ケアを提供していた。またこれらの評価結果は定期開催されるケース会議において、ボランティアも含めて情報共有がなされていた。そしてこのケアプランに沿って高齢者を最適な健康状態へと導いていくが、例えば実際にデイケアで行われる運動に参加するかどうかという決定権は高齢者に委ねられていた。その理由を尋ねてみると、「デイケアを利用している高齢者は強制されることを嫌うからだ」とのことだった。そのため、多くのスタッフがレクリエーションやリハビリテーションを提供するときは、「まず楽しくあることを心がけている」と述べた。またあるスタッフは、「身体よりも最初に心をケアすることのほうが重要だ」と話す。「楽しい、充実していると感じることができたら、自動的に身体を動かすようになる」と述べた。デイケアを利用する高齢者は、将来にわたって健康であり続けるために時間を費やすよりも、今、その瞬間が幸せであることのほうが大切であるということが明らかになった。またスタッフは高齢者のそうしたニーズに応えながらも、彼らの健康増進を図るために日々、工夫してレクリエーションやリハビリテーションを提供していた。

ポイント③について

タイの高齢者はその状態によって、「社会生活が自立している者」、「外出困難者」、「寝たきり」という３グループに分けられる。社会生活が自立している者はアクティブ・エイジングと呼ばれ、タイにおける高齢者の理想像である。デイケアを利用する高齢者の中にはアクティブ・エイジングを目指して、リハビリテーションを行う者もいたが、通所目的が異なる者もいた。彼ら多くは、外出困難者に属する者であり、生理的な心身機能の低下、生活習慣病などの複数の疾患によって、常に病状の悪化や転倒といったリスクを抱えていた。そして日中は同居する家族が仕事や学校で出かけているために「孤独だから、話し相手のいるデイケアに来る」と話す高齢者がいた。つまりデイケアを利用する高齢者の中には孤独を解消として、サービスを利用している者が存在したのである。また高齢者家族にインタビューすると、リハビリテーションというサービスに魅力を感じる一方で、医師や看護師という専門職種が常駐していることで安心感があるという点に魅力を感じていた。彼らは「デイケアに行っている間は安心できる」、「安心して自分の時間が過ごせる」という。つまり高齢者の家族は安心感とレスパイトケアにサービス料を支払っている側面があった。

【フィールド調査を終えた時点での成果】

フィールド調査により以下の 3 点が明らかになった。

1. デイケアは、高齢者の健康増進を推進する場であると同時に、社会交流の場でもある。
2. 高齢者やスタッフの関係性は、状況に応じて擬似的な家族のような関係になる。そうした親密な関係性は、時に高齢者の健康増進やエンパワーメントを促進する。
3. 利用者である高齢者とその家族のニーズは、健康増進という点では一致しているが、相違も見られる。高齢者のニーズは孤独感の解消であり、家族は安心感やレスパイトケアという側面がある。デイケアのスタッフはこうしたニーズに応えるために、そして高齢者の健康増進を促進するという目的も達成するために日々、工夫しながらサービスを提供していた。引き続き、分析をすすめていく。

留学中の生活・研究でのトピックス

私は新型コロナ感染症ウィルスによる世情の混乱が収まらない中、タイに渡航しました。当時、空港は閑散として、空港内の薄暗い照明に同調するように私の不安も募ったことを覚えています。対して、一年のフィールドワークを経て日本に帰国する頃には、空港は多くの人で賑わっていました。搭乗を待つ人々の中には、海外旅行に胸を躍らせ明るい表情を見せる人がいたり、忙しそうにパソコンに向き合う人がいたりして、ようやく平時の生活に戻りつつあると感じました。私は、新型コロナ感染症ウィルスによる混迷のときから平時の生活を取り戻す過渡期をタイで過ごしたと言えるでしょう。そうした環境に身をおく中で、特に食事にまつわるエピソードが強く印象に残っています。調査地は高齢者が集う施設という特性上、感染症対策を徹底していました。調査開始当初は高齢者が昼食を摂る際、前方と左右に衝立を立てて、互いが見えない状態にありました。やがて感染者数の減少とワクチン摂取者の増加等に伴い、昼食時に衝立を設置しなくなりました。そうすると高齢者やスタッフ間の食事時の会話が増えて、人々の表情が柔和になっていきました。互いの顔を見て、「美味しいね」といったように気持ちを共有することで親密さが増していったのです。また私は調査開始から半年が過ぎた頃、高齢者施設で働くスタッフと就業後に食事に行く機会が増えました。それを機に彼らが仕事の悩みを打ち明けてくれるようになったり、私をチームの一員だと言ってくれたりと、それまで以上に信頼関係が高まったように思います。これらはまさに「同じ釜の飯を食う」ことの意味を体感した経験となりました。

前述のとおり、調査地は日々の高齢者ケアとあわせて感染症対策に力を入れていました。それでも「また来週、お会いしましょう」と挨拶をして別れた高齢者と二度と会えないという経験をしました。そうした出会いや哀別を経て、最期まで自分らしく生きるとはどういうことか、それを支援するということはどういうことか、改めて考える機会となりました。本助成によって実現した一年に渡るフィールドワークは研究という範疇を超えて、多くの学びと素晴らしい人々との縁を与えてくれたように思います。改めてご支援いただきました松下幸之助記念志財団の皆様に深く感謝申し上げます。

今後の社会貢献

約１年間、デイケアで調査する傍らで、周囲のスタッフからは作業療法士として意見を求められることが多くありました。高齢者にリハビリテーションを実施するにあたって認知症や身体障害、生活歴等、配慮すべき点が多く、現地のスタッフは個々の高齢者について熱心に意見を交わしていました。そのカンファレンスの様子を見学させていただく中で、次第に私も参加者として意見が求められ、議論することが増えていったのです。それを通して私は現地の人々が何に重きをおいて高齢者への支援を考えているのか、多くの気づきを得ることができました。そしてこの協働が、現地の人々にとっても有益であったとして、デイケアの所在地であるＢ市の市長に感謝状を頂きました。この経験を通して研究者であり作業療法士でもある自身の立ち位置というものを再認識することができました。帰国後は、研究者として新たな知見を論文として発信し、医療人類学やリハビリテーション科学における研究に貢献していきたいと思います。また日本とタイの臨床現場を知る作業療法士として、高齢者リハビリテーションにおける日本とタイの学び合いの促進や国際性豊かなリハビリテーション専門職の育成に寄与したいと考えます。

写真１　デイケアの皆さんと近所のカフェにて

写真２　スタッフの要請で運動方法を提案

写真３　感謝状授与のようす